

「一冊の街」 Image View

年に一度、秋に開催される立川の共同アトリエでのアートイベント、「石田倉庫のアートな2日間」。2007年度より、ここで「鉄製品をぺらぺらに叩く」ワークショップを行ってきた。これは、さまざまなスチール製の廃材を集め、これを炉で赤熱し、来場者にハンマーで叩いてもらう、というものである。(本年は10/24,25に開催)この3年間を経て集まったぺらぺらの鉄たちを、ひとつの彫刻作品として完成させる。市庁舎の外構、植栽内に大きな「鉄の本」を設置し、そのページ内にワークショップで得た「ぺらぺらの鉄」を取り付ける。古代遺跡のような鉄たちは、立川の現代の姿を映し出す。



立川市新庁舎アート作品企画書

市の拠点となる庁舎へ、市民の手を経て出来たものをアート作品として昇華させる。これを実現させる為に、「石田倉庫のアートな2日間」は恰好のイベントだった。飲食店なども盛り込み、「お祭り」の形態を持ったこのオープンアトリエは、現代美術の難解さを取り除き、より多くの人々が気楽にアートと触れ合える利点がある。昨年は4000人の来場者を記録し、その大半は立川市在住の方々であった。同時に、自分の仕事場だからこそ、大胆な企画も可能となる。単純な作品展示だけではなく、ここで積極的に「火」を扱うワークショップをメインに行うことで、オープンアトリエの仕組みを最大限に活かせると考えた。

内容はいたって単純。ひたすら真っ赤になった「鉄のモノ」を、みんなで打つ。1300℃を越えるコークスの火力は、「冷たい、堅い」といったスチールのイメージを排除する。そしてハンマーを介して「熱く、柔らかい」感触を味わう。まるで生きているかの様に変容した工業製品の姿に、鉄の素材本来の純粹さを見出すことが出来た。小さなお子様や年配の方まで参加していただき、ここで得たモノや賑わいの時間は、ここでしか成り立たない出来事であった。祭りのあと、残された鉄たちは「街の記憶」となった。

記憶を遡ると、それはスチール製品そのものにも強く宿っている。廃品となるまでにさまざまな人の手に渡り、例えば傷や歪みという姿でモノに刻み込まれるのだ。愛用されたものも、酷使されたものも、モノは素直に、無言に、痕跡を残している。こういった道具の記憶を掘り下げていく作業は、その過程で数多くの「人の気配」と出会う仕事でもあった。

そして、「動」から「静」へ。

紙の様にぺらぺらにされ、集められた記憶たちは一冊の本に集約される。文字も数字もないこの本は、無言でありながら、数多くの市民の気配を語る。ゆえに、これは立川市のさまざまな営みを照らし出す史書とも言える。そして将来の文化のあるべき姿を書き綴るスケッチブックでもある。いずれにせよ、この彫刻に関わる全てが街と深く結びつくものであり、冷え固まった鉄は不変の記録となる。「一冊の街」と題した。

